2021年度　上期番組審議会　ヒストリーチャンネル意見書

作品：「ビンラディン殺害計画の全貌」

■未だに謎多き2001年9月のアメリカ同時多発テロ事件。2021年はその20年目にあたりくしくも米軍アフガン撤退の年となった。そんな中、10年間極秘ミッションとして追い続けたテロリスト集団アルカイダのリーダー、オサマ・ビンラディン殺害の全貌をタイムリーに紹介した作品で高く評価したい。
その実態を実際関わったオバマ元大統領、ヒラリークリントン元国務長官をはじめCIA軍、突撃隊員関係者まで登場させ、ここまでリアルに再現してみせてくれるとその構成の巧みさもあり緊張感までも伝わり時間の長さを感じさせない作品に仕上がっている。まさにヒストリーチャンネルならではの作品である。
しかしまだ全ての資料が公開されているとは思えず、ここまで危機管理に関する米国の様々な部署の作戦の内容が作品とは言え公開されて良かったのだろうか？やはりこの内容は全てではないのではなかろうか等の疑問は残る。

■2001年の同時多発テロから20年、アメリカにとって当初の目的であるビンラディン殺害が成功した顛末が描かれる。良くできたドラマのように迫真性があり、それだけに複雑な印象だ。この時点でアフガニスタンへの介入を止めておけば、「20年戦争の失敗」は避けられたのだろう。帰還した兵士がゴミ出しに出たときに「隣人が何をしているのかは分からないものね」と言われる最後の話は秀逸である。

■この種の超極秘作戦が、50年や百年後ならともかくこの時期に作られるのはどういうことか、と考えさせられる。つまり過激派集団に手の内を明かすことになるので、この手はもう使えないと判断したからか。結局はCIAの苦労話、自慢話に終わっており分かってみれば「なあんだ・・」で終わってしまう話だ。またテロリストにはこういう末路が待っている、というメッセージのつもりならむしろ敵愾心、さらなる復讐心をあおるだけだろう。ドラマならともかく、思わせぶりに影絵を使ってやるドキュメントではない。テロリストあざむくギミックなら、まだしもだが。

■9.11同時多発テロの首謀者。ビンラディン暗殺計画について、当時のオバマ大統領、CIA長官、米海軍の作戦指揮官、突撃した海軍特殊部隊のメンバーらに対するインタビューで構成された本編には、圧倒的迫真性があり、極めて興味深い作品に仕上がった。ビンラディンがいるかどうか確信が持てないまま、他国領土に侵入して殺害するという計画は、相当にリスキー。そんな重大事案でも時が経てば、責任ある当事者がメディアに出て証言するという米国の姿は、政策決定に関する情報を隠蔽し、改竄さえ厭わない日本から見れば羨ましい。

■9.11から20年に相応しい番組。基本的には9.11から10年目の2011年にHistoryとChannel4で放送された「Targeting Bin Laden」と同じ内幕物で特に目新しいものではないが、オバマ大統領の最後ま

での逡巡ぶりと攻撃からの帰路の詳細が語られている点と、殺害作戦実行部隊の兵士たちの証言が得られている点が新鮮に感じられた。10 年前の番組とは違って再現映像に頼らず証言を積み重ねている点に好感を持った。国立 911 記念博物館とのコラボレーションの成果として評価する。

■詳細な取材による証言の積み重ねにより、ビンラディン殺害計画が決して容易なものでなかったと知る。ヒゲを染めていたという話にビンラディンの心理が表れていた。肩書、氏名等を含め字幕が多く読むことに時間をとられて映像をじっくり見られなかったことが残念。

■絶妙な時期に視聴することになった、文字通り「現代史」の証言集。つい最近のことなのに、ここまで内情をオープンにしてよいのかと思われるほど。しかも逆説的な言い方だが、現実というよりも、映画かドラマを見ているような息もつかせぬリアリティがある。映像に見どころがあるわけではないのに目が離せず、正味 1 時間 25 分飽きさせない。直接関わった責任者が発する言葉の力だろう。(今となっては、この番組の柱でもある、極度なカリスマ性のある個人を標的に、「報復」こそ「正義」というそもそものスタート自体への違和感が増大するが、しかしそれが政治・歴史の現実なのだ。) このような領域の責任者にも女性が登用されていることに驚くが、番組構成上は効果的。

作品：「名もなき人々の戦争」

■米国と戦争した事実すら知らない若者が存在する今凶の日本において日本の近現代史、中でも戦前史、戦後史を知らしめることは重要なことと思われる。そのような見地に立てばこのような作品は貴重である。しかしながら軍人以外からの目とするには切口や内容が一方的で希薄で「前例のない真実のドキュメンタリー」とは言えない。淡々と述べてくれているのは北原氏くらいで他は私見が多く戦争について述べた数ある中の一つのドキュメンタリーと言うべきであろう。

■加害者から被害者の側面まで、「あの戦争」の歴史が理解できる。「自分の身辺が闘いになっていく」という野見山暁治の言葉が印象に残る。(撮影時 100 歳近い？）ユタ州に日本家屋を造って、M69 焼夷弾を開発する話など、アメリカの底力を思う。沖縄戦の描写も丁寧。タイトル「War of innocents」は、無垢な人々の戦争ともとれるし、邪気はないが能天気な人々の戦争とも解せるのは深読みしすぎか？

■最後の字幕のスタッフには、日本人らしき名前も多かったが、記録フィルムといろいろな証言の談話を交互に挟みながらつなげていく構成は、やはりアメリカ制作だと分かる。もっとも、この方式はパターン化されてしまって、いささか新鮮さに欠けるものがある。中には、未見のフィルムも含まれており、その意味では貴重な映像作品だと思うが、視点がやはりアメリカ寄りなので抵抗を感じる向きもあるかもしれない。火災放射器で、民間人まで皆殺しにするシーンと、子供たちに菓子をばらまく米兵の姿には、驚くほど連続性がない。悪いのは戦争そのものだ、とあらためて思い知らされる。

■「軍人以外の目から、日本国民の日常生活を見つめた、未だかつて前例のない真実のドキュメンタリー」という惹句はオーバーに響くが、戦時中の学校や婦人会活動、勤労動員等の名もなき人々の日々を中心とした記録は貴重である。対馬丸、東京空襲、沖縄戦等々を体験した方々の証言は、生きているうちに伝えておかなければならないという強い意志が感じられ胸に沁みた。海外向けの作品かもしれないが、現代に生きる日本人、特に若者に見てほしい。年に一回は、戦争について考える機会を持つべきである(8月ジャーナリズムで可)

■名もなき一般市民の眼から見た日本の戦争の歴史を分かりやすく描く番組として評価する。特に玩具コレクターや洋画家の眼からみた戦争は独特の切り口が示されて興味深い。膨大なアーカイブ映像から検索した貴重な映像を的確に構成しながら、内外の動きをバランスよく描いている点も評価したい。ただし、沖縄戦や東京大空襲などについては詳しく伝える一方で、広島・長崎の原爆投下については終戦を早める結果となったとしてわずか 30 秒の説明で終わったことは、日米の歴史観の違いを明白に示すことになった。

■戦争を経験した人々の証言と、雑誌や玩具といった生活に密着したものを同時に紹介することにより、戦時の日常がリアルに浮かび上がった。普通の人々がいかに洗脳され苦難を強いられたか。そして自分達もそうなる可能性はあることを知るためにも若い人々に見てもらいたい作品。

■制作の使命感、意図、映像や写真の選択にも強い意志と攻めの姿勢が伝わってきた。一般市民が自然かつ巧妙に「勝てぬ戦争のために命を捨てるように」変貌する過程が分かりやすく描かれ、記録資料、教育資料としても広く活用価値がある。が、詰め込み過ぎたきらいもあり、被災証言は貴重だが、正味 1 時間半で多方面を扱うには無理がある。世界情勢を見れば、冒頭の「これは一国の栄枯盛衰の物語である」や、「人類史上例を見ない苦痛に耐えた一般市民」には違和感があり、「世界大戦は今日の日本に何をもたらしたのか」「日本人が今日にいたるまで平和主義のこだわる理由を明らかにする」には至らなかった印象だ。沖縄映像からのスタートだが、ごく普通の町や村の庶民生活で、おもちゃ・雑誌・絵本・ポスター・学校教育・生活の工夫等々「名もなき」人々の暮らしが変容、軍国少女・少年・主婦へと変貌するさまに特化するのも一案だったかもしれない。

その他ご意見、課題など

■優れた制作力、どんどん発揮してください。

■NHK などでかつて放映されてドキュメンタリー作品を、再放映できないものか。あるいは、すでに行われているかもしれないが、膨大な数が残っているはず。権利関係や、購入金額の問題もあるだろうが、検討していただきたい。

■日本製オリジナル作品の更なる充実につとめてほしい

■原爆投下の評価を除けば、「名もなき人々の戦争」のような番組は人々の共通の理解と価値観を育むものとして極めて意義深い。History　Channel　Japan のオリジナル番組として世界に広く発信してほしい。

■日本にとっての 8 月、アメリカにとっての 9 月はともに「現代史」上特別の意味を持つ。昨今の社会状況下では、重いラインナップとなった。しかもどちらも今日のそれぞれの社会の在り方に今なお色濃い影を落としている。貴チャンネルでは今後も様々な角度や手法で扱い続けるべき主要テーマ・分野であろう。
今回の日本オリジナル制作番組は、良質高品質で説得力もあり興味深く拝聴した。英語ナレーションだったので海外も対象にしているのだろうが、日本の若い人にこそ見てほしい。しかし
2 時間番組正味 1 時間半、この内容を深く伝えるには短過ぎ、高校生大学生が一気に集中して見るには長すぎる。色々事情はあろうけれど、視聴意欲を誘う工夫（前後編核時間など）にも期待したい。